

第 33 回日本顎変形症学術総会・学術大会

ランチオンセミナー3

我々の新たな取り組み
～顎変形症治療の高みを目指して～

6月9日(金) 12:40-13:40



A 会場 学術総合センター（一橋講堂）中会議場 1・2

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2 <https://www.hit-u.ac.jp/hall/accessjp.html>

山内 健介 先生

【座長】 東北大学大学院 歯学研究科 顎顔面口腔再建外科学分野 教授



【演者】

当科における顎変形症手術後の
鼻腔トラブルに対する取り組み

森山 雅文 先生

九州大学大学院歯学研究院 口腔顎顔面病態学講座 顎顔面腫瘍制御学分野
九州大学大学院歯学研究院 OBT 研究センター若手育成のための患者顎骨模型を用いた
顎矯正手術の Cutting Academy の試み

大井 一浩 先生

金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 外科系医学領域
顎顔面口腔外科学分野

我々の新たな取り組み ～顎変形症治療の高みを目指して～

抄 録

当科における顎変形症手術後の 鼻腔トラブルに対する取り組み

森山 雅文 先生

九州大学大学院歯学研究院 口腔顎顔面病態学講座 顎顔面腫瘍制御学分野
九州大学大学院歯学研究院 OBT 研究センター



開咬やガミースマイルを伴う顎変形症患者では、良好な咬合や美的改善を獲得するために上顎骨の後上方移動が必要となることが多いが、翼状突起や下行口蓋動脈周囲の骨の干渉を取り除く必要があるため、手術の難易度は高くなる。しかし、近年の超音波切削器具の導入や手術法の改良により、後方の骨干渉を比較的安全に取り除くことが可能となったため、Le Fort 1 型骨切りによる後上方移動も積極的に行われるようになった。その一方で、術後に鼻閉や鼻中隔彎曲などの鼻腔トラブルを訴えられる患者も散見される。当科では、手術計画で後上方移動量が多い症例では、後方の干渉を取り除くために U-shape 法にて下行口蓋動脈 (DPA) を含む周囲骨に可動性を持たせた上で、超音波切削器具にて周囲骨を分割・摘出することで、DPA 周囲の骨を完全に取り除く術式 (U-shape osteotomy + osseous release) を採用している。さらに、上方に 5 mm 以上の移動量が必要な症例については、上記術式に馬蹄型を加え、口蓋骨を下方に落とすことで鼻腔容積を確保できる術式 (modified U-shape osteotomy + osseous release) を採用している。また、当院耳鼻咽喉科と連携し、顎変形症患者の術前後におけるファイバーによる鼻腔の形態的評価 (鼻中隔の彎曲の有無、下鼻甲介の腫脹、気道の幅、声帯の動きなど) と鼻腔通気度計を用いた機能評価 (鼻腔気流の定量的計測) を行っており、鼻腔トラブルに繋がる因子の解析 (因子分析) を進めている。術後の評価で鼻中隔彎曲や鼻閉が遷延もしくは悪化した症例では、必要に応じて耳鼻咽喉科と合同で、梨状口周囲の削合や内視鏡下での鼻中隔矯正術や粘膜下下甲介骨切除術を行っている。本発表では、当科で採用している「U-shape osseous release」の術式や鼻腔トラブルへの取り組みの詳細について述べさせていただく。

抄 録

若手育成のための患者顎骨模型を用いた 顎矯正手術の Cutting Academy の試み

大井 一浩 先生

金沢大学大学院 医薬保健学総合研究科 外科系医学領域
顎顔面口腔外科学分野



近年、学会や教育機関において若手の育成に関するテーマが盛んに取り上げられ、顎変形症治療でも顎骨模型と実際に使用される手術器械を用いた研修会が、国内外で行われている。どの研修会においても受講者にとって有益な講義や実習が組まれており、私自身も国内外で何度も参加させていただいて、とても勉強になった思いがある。顎変形症手術を執刀医として安全に行うためには、術式や合併症 / 偶発症を理解し、手術の助手を経て、指導医のもとで執刀医として研鑽を積み、指導医を離れて独立していくといった段階を一つずつクリアしていくことが望ましいと思われる。しかし、顎変形症手術を執刀したいと思った口腔外科医が、その時点でどのような環境にいるのかによって、その達成までの道のりは異なる。顎変形症手術の術式は基本的なところは共通しているが、下顎枝矢状分割術一つをとってもいわゆる Short split、Long split の違いや使用するプレートやスクリューの違いなど、症例の特徴によって術式を変えるだけではなく、指導医の考え方や施設的环境によっても異なる。さらに、骨切り用器械や固定材料も日々進歩しているため、常に知識をアップデートしていく必要もある。このような状況から、若手の育成を考えた時、われわれは標準的な治療の理解の次に、一つの症例に対するさまざまなアプローチの違いについても勉強する機会が必要なのではと考えた。しかし研修会の開催は、器材の準備が容易ではなく、全国規模の限られた参加枠で行われたり、高額な費用がかかったりと準備側も受講者にも、ハードルが高い問題があった。Cutting Academy はストライカー社の教育への貢献の取り組みとして提供されている勉強会で、我々はこの取り組みの支援を得て 2022 年 7 月と 2023 年の 1 月の 2 回、金沢大学にて近隣の大学と病院口腔外科の有志にて、地域に根ざした研修会を開催した。第 1 回は基本的な術式や周術期管理の講義と既成の規格模型を用いた実習を行い、第 2 回はより深い内容で講義を行い、実際の顎変形症患者の CT データから作成した 3 次元顎骨模型を作製して実習を行った。模型は下顎骨では骨髄を色付けし、皮質骨切りから分割に至る手技が実際の手術に近い形で実施できることを事前に確認した。また受講者に事前に模型に使用した患者データを配布し、治療方針について事前にアンケート調査し、模型実習に入る前に討論した。模型実習では、統一した術式ではなく、各ブースの指導医と受講者が議論しながら骨切りとプレートやスクリューを選択し、最後に各ブースでの術式の違い等を討論した。この実習では、受講者からより実際の手術に近い体験ができたなどの前向きな感想だけではなく、指導医間の情報交換や若手教育における問題点の発見も得られ、指導医側にとっても有益な研修会になったと思われる。本セミナーではその概要を報告したい。